昭和五十六年四月二十九日　史跡めぐり資料

第一〇九回

史跡めぐり資料

三浦半島地区

双笠城跡

新井城跡

越谷市郷土研究会

理事　山崎善司

第一〇九回　史跡めぐり案内

一、日　時　四月二十九日　天皇誕生日

一、集　合　越谷駅前　午前　七時　〇分　集合
　　午前　七時二十五分発　乗車　準急

一、行　先　三浦半島〜衣笠城跡〜新井城跡

越谷駅ー人形町ー乗替〜横須賀中央口（京浜急行）下車〜バス・衣笠城入口
衣笠城跡入口〜三崎口乗替〜油壺　下車

満昌寺　ー　三浦義明の墓　（鎌倉時代）
清雲寺　ー　三浦初・二・三代の墓ー三浦党九十三騎の墓　（平安時代）
衣笠城跡ー大手門跡ー二の丸ー本丸ー物見台　（鎌倉時代）
大善寺　ー　三浦義明一家の墓　昼食

新井城跡ー　三浦義同の墓ー荒次郎義意の墓　（室町時代）
　本丸跡ー千駄矢倉跡

新井浜　ー　東京大学海洋実験所（非公開）

一、帰　路　油壺マリンパーク前〜三崎口〜乗替京浜急行〜人形町〜乗替越谷駅　解散

一、会　費　一、金参千円也、　但し、昼食は各自持参の事。

以上

三浦義同道寸　辞世の句

うつものも　うたれるものも
　かわらけよ
くだけてのちは　もとの土くれ

油壺　しんととろろと　して深く
しんと　とろろと　底から光り

白秋

夕焼小焼　大風車の上をゆく
雁が一列　鴉が三羽

油壺から諸磯見れば　まんまろな
赤い夕日が　いま落つるとこ

萩原井泉水

磯の娘

むすめ　むすめ　城ヶ島の娘
おまへ　裸で　海の底
朝も早うから　真逆様に
波を潜れば　青波ばかり

城ヶ島の女子　うららに裸となりて
飽　取らいで　何思ふらんか

白秋

三浦氏の興亡

三浦氏の起立

三浦氏の起りは、前九年の役（一〇五一～六二）の時源頼義に従した村岡平大夫為通は戦功著しく其の恩賞として三浦郡を賜わり移住して三浦姓を称した。

初代為通は、所領中央にて街道に近い衣笠の要衝の地を本拠となし、邸館を設けた。康平五年（一〇六二）の事である。

二代為継は後三年の役（一〇八七～九〇）に源義家に従ひ、奥州に赴く。

三代義継は、相模介に任ぜられる。

四代義明は大介を称し、一族は三浦郡の各地に住し、衣笠城の支城を築く、義明の末弟四郎義実は中郡岡崎に移住し、岡崎城を築く、而して三浦氏の威勢相模大半に及ぶ。

源家の三浦氏えの信頼は厚く、源義朝が男義平の養育を、義明に依頼した程である。

源家の旗挙と義明の討死

治承四年（一一八〇）伊豆に流されていた頼朝は、以仁王の令旨を受けて安達盛長をして頼朝旗挙の際に協力する様各地の恩顧の豪族に沙汰したる処、皆相手にせぬる中に、義明は威義を正し落涙をして喜び合力を約したと云う。

同年八月、源頼朝は伊豆に兵を挙げ、目代の山木判官兼隆を血祭にし、三浦氏と合流する為石橋山へと進む。

之に対し、平家方大将大庭景親等は、三千余騎を以て石橋山を包囲した。一方、頼朝を援助する為三浦義澄以下三百余騎は、海路の予定が風雨激しき為陸路を夜を日に進んだが、途中丸子川（今の酒匂川）の洪水に阻止され、逐に石橋山の合戦に間に合ず、頼朝の敗戦を聞き止むなく引返す。途中平家方の畠山重忠の軍勢五百余騎と遭遇、小坪にて合戦に及ぶ、畠山は親しき一族の故和義して衣笠城に帰城す。党主義明は全軍を衣笠に結集さす。

畠山重忠相武の兵三千余騎を率いて、二日後の八月二十六日衣笠城を攻撃する。守るは三浦党合せて四百五十三騎、激しく攻防戦つたが、日も暮れ戦も止んだ。党主義明一族を集結、頼朝石橋山に敗れたりと雖も、再挙を図るべく安房に落去、三浦党之依城を脱出し急機安房に渡るべく命ず。去る程に途中海中にて頼朝の主従七騎と遭遇安房に無事上陸するを得た。

然れども義明一人、八十九歳の老齢なれども最後迄城中に踏止まり身辺の整理をなし、明く る日城を枕に討死と定めた。衣笠城は翌日落城し義明捕えられて、畠山に討ればやと思きに、叶わず江戸太郎にぞ斬られけり。

和田の乱

鎌倉幕府開かれるや、三浦義明の嫡孫和田義盛は侍所別当に任ぜらる。之の要職に付きたるわ父祖義明、頼朝の為死する恩儀に報いん為と云う。而して三浦一族其れぞれ皆要職を占め繁栄せり。

然るに、建保元年北条義時の策謀による挑発に遭い北条を除かんとして一戦に及びしが、敗れて和田義盛以下一族郎当・三浦の党も組方加わり皆討たれて壊滅した。建保元年（一二一三）五月三日の事である。

宝治の合戦

三浦氏七代泰村の代に至り、北条時頼若冠二十歳にて執権となるや、先に執権経時により将軍職を辞任させられた頼経は、子頼嗣に其の職を継がせ引退京都に帰京させられる処、帰らず「大殿」と呼ばれて依然幕府内に陰然たる勢力を保持した尽てあつた。

翌寛元三年（一二四五）春、経時重病となり其れを期に鎌倉中陰謀の風聞持上る。未然に処理され不発に終る。翌寛元四年三月経時は執権職を弟の時頼に譲り一ヶ月後に死した。（死因に種々取沙汰有）

経時の死と共に事態は急展開し、先に将軍職を追われた「大殿」頼経を押立てて幕府内の実権を奪おうとした執権時頼の叔父光時等名越の一族（北条）、後藤、千葉等の評定衆、問注所執事三善氏等の重臣の陰謀に対し、之を打破して政権の座を確保した時頼は、叔父光時を出家させて伊豆に流し、其の弟時幸を自殺させ、関係者多数を処分した。

兄経時死後の政争を処理した時頼は、「大殿」頼経を京都に追放した。翌宝治元年（一二四七）には、評定衆三浦光村（泰村の弟）を、「大殿」頼経を戴く陰謀に加担していた事を捕え当時幕府内で北条氏と肩を並べる程の勢力の豪族三浦氏に戦を挑み、安達氏等の後援を得て、あらゆる挑発・謀略を使い、戦に持込む、三浦党合戦の準備に一族親類の者供集結したる処、待構えて機先を制して取囲み、三浦泰時以下一族近親の者五百余人悉く頼朝の墓所法華堂に追詰られ自害し三浦氏は此処に滅亡した。

先に和田の乱の時、義盛に誘われたが組せず義村一人北条方に与して和田討滅に功有るにより保身し幕府の重職を維持来りけるも、宝治元年を以て、衣笠城其の支城と共に滅び以後廃城となる。三浦為通より七代、泰村迄衣笠城在住百八十余年の歳月であつた。

佐原三浦氏の台頭

宝治合戦に泰村以下一族悉く滅亡した中で、佐原義連の孫盛時之謀に加担せず、北条に味方して功有に依、三浦領南半分を領し新井城を築き、三浦介の微号を継ぐ。

衣笠城跡　市内衣笠町。横須賀駅からバス、衣笠城跡入口下車。

衣笠公園とは谷地一つを隔てた南西方にある丘陵地一帯で、平安末期三浦半島全域に威を張った三浦氏一族の本拠となっていた平山城の跡である。

三浦氏4代大介義明は、治承4年（1180）8月、源頼朝の挙兵に応じてたち、平家方の畠山重忠・江戸太郎重長らに率いられた3,000余の軍勢をここに迎え討った。守る城兵は450余騎、一歩もひかず激戦を展開したが、頼朝の石橋山の敗戦を聞き、戦い利あらずと見て2男の義澄らを安房へ脱出させた。城に踏みとどまった義明は、一族が無事に船出したのをきいて館に火を放ち、館と生命をともにしたというが、源平盛衰記には、江戸重長らに切られたとある。89歳であったという。

のち鎌倉に幕府を開いた頼朝が、義明の遺徳をたたえてたてたのが義明山満昌寺で、ここで建久7年（1196）盛大な17回忌がおこなわれた。この時頼朝はその功績をしのんで「大介は今も生きている」といったといい、これが、すなわち戦死したときの89歳に17回忌の17をたした106が、土地の古老たちが長寿を話題にする際引合いにだす"三浦大介百六つ"のはじまりという。

城は宝治元年（1247）、鎌倉の頼朝法華堂で、北条氏に三浦泰村以下一族が滅ぼされてからは廃城とされたが、今も大手門口・物見岩・旗立岩などの遺構を残している。城跡全体が市の史跡指定を受けている。

大善寺　市内衣笠町。

衣笠城跡内、城の最高部から東へ下った山腹にある。山号は金峯山。行基の開山といい、かつてはこの山の、不動堂の別当であったが、元和4年（1618）僧徹岸が曹洞宗に改めた。

寺の裏手には三浦氏累代の墓があり、そばのひときわ高い台地に"物見岩"があって、「衣笠城跡」の碑がたっている。物見岩は三浦大介が落城寸前ここに立ち、おしよせる畠山重忠の軍勢を望み見たところと伝える。

境内にある不動尊は行基の作で、三浦氏の祖為通が城の守護神としてあがめたものという。

寺の前、若むした石段を下ったところに、"御手洗池"と称する6mばかりの井戸があり、付近一帯の平地が、三浦氏の居館跡と推定されている。

〔宗派〕曹洞宗　〔山号〕金峯山　〔開山〕行基

三浦半島

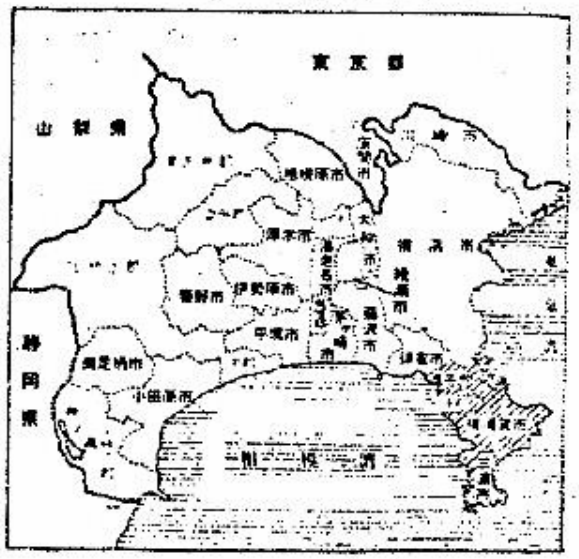
☆……東京・相模の両湾をわけて南方太平洋上に突出する三浦半島は、気候温和で澄明な空気、明るい空のもとに緑の丘陵が続き、海岸線は静かな砂浜と荒波が砕け散る岩礁が交互に開けて変化に富んでいる。京浜地区から国鉄・私鉄を利用して約1時間、近年別荘地としてもブームを呼んでいる。

逗子市。半島の西側基部に位置する観光都市で、その南側、葉山御用邸のある葉山町とともに夏は海水浴客で雑踏する。

半島の東岸部から中央部を占める横須賀市は、戦前日本帝国海軍の基地として栄えた軍都。今は米海軍第七艦隊の実質的な基地である。市内には三浦按針墓や日本海々戦の旗艦三笠、ペリー上陸記念碑・荒崎海岸、わが国最初の洋式灯台観音崎灯台などの史跡・名勝がある。

半島先端部に位置する三浦市は、東日本最大の遠洋漁業基地三崎港をもつ水産都市である。港の前面に横たわる城ヶ島は北原白秋の詩で知られ、油壺や剣崎灯台・大悲寺など見どころも多い。

▼位置図



清雲寺

市内大矢部町。横須賀駅からバス、衣笠城跡入口下車。

満昌寺の先から南へ入った丘陵地にある。山号は大富山。嘉承年間(1106～08)三浦氏3代義継が、父為継の菩提を弔って一字を建立したのが始まりといい、はじめ天台宗で奉仕されたが、応永年間(1394～1428)大雅清音が入山、臨済宗に改めたという。

本尊は"滝見観音"と呼ばれる観音菩薩像で、もと臨済宗円通寺(市内大矢部町)にあったもの。市の重要文化財に指定されている。

寺宝の木造毘沙門天立像は、像高70cmの小像ながら堂々とした風格をもつ鎌倉後期の秀作で、県指定の重要文化財。鎧の止め金に銅板をとりつけ、カブトを別につくったり、頭部も結髪を表わすなど、写実的な表現に注意が払われている。

本堂裏手の小高い丘には、三浦為通・為継・義継三代の墓と称する五輪塔があり、そのわきには三浦党93騎の墓という小さな五輪塔が並んでいる。

また近くに"大介腹切松"と呼ばれる老松が田の中にあったが、今は枯れて碑のみが残っている。

〔宗派〕臨済宗円覚寺派　〔山号〕大富山

満昌寺

市内大矢部町。横須賀駅からバス、衣笠城跡入口下車。

バス停から三崎街道を先に100m程進み、左へ400m余り入った左手、山麓にある。山号は義明山。建久5年(1194)源頼朝が、衣笠城主三浦大介義明追悼のため、左京進中原仲業に命じて建てさせたという臨済宗建長寺派の寺。開山は仏乗禅師中興開山は懸広と伝えられている。

堂宇は本堂・庫裏・山門・鐘楼堂などを備え、寺宝の木造天岸懸広坐像は市指定の重要文化財。

本堂わきにあるツツジの古木は、頼朝の手向けと伝えるが、頭痛もちの人がこの下をくぐると頭痛がなおるともいう。かたわらに三浦大介の記念碑がたっている。

本堂の左手奥から石段を登った山腹には、三浦大介の木像(市指定文化財)を安置する御霊神社があり、この右側から本堂裏手へ回ったところに、カワラ塀に囲まれて三浦大介の墓がある。三つの石塔のうち真ん中の宝篋印塔がそれ。"首塚"とも呼ばれている。この側には、大介の幼少のころから仕え、死後もここに草庵をひらき、墓守りとして一生を送ったという"矢部の媼"の墓もある。

寺の西側、山腹には珍しい磨崖仏があり、本堂背後には小さな庭池を中心とした庭園が、わびたたたずまいを見せている。寺の背後に続くマダケの山も見事で、春さきにはタケノコが群生する。

〔宗派〕臨済宗建長寺派　〔山号〕義明山　〔開山〕仏乗禅師

衣笠城

①―― ②横須賀市衣笠町 ③山城 ④三浦為通
⑤康平五年 ⑥井戸、土塁、堀切

三浦氏累代の本拠である衣笠城は、衣笠町大善寺周辺の衣笠山にある。

前九年の役（一〇五一―六二）で源頼義に従った村岡平大夫為通は軍功著しく、その恩賞として三浦郡を賜わって移住し、三浦氏を称した為通は、所領の中央で、街道にも近い衣笠の要衝を選んで本拠とし、邸館を設けた。康平五年（一〇六二）のことである。

二代為継は後三年の役（一〇八三―八七）に八幡太郎義家に従った。鎌倉権五郎景政が鳥海弥三郎の矢を右目に受け、その矢を三浦為継が抜こうとして景政の顔に足を当てると、景政は怒り、刀を抜いて為継を突こうとした。そのため、為継は、膝をかがめ、顔を丁重に押えて抜いたという（『奥州後三年記』）。

四代大介義明の代になると一族は三浦半島の各地に住し、衣笠支城を築いた。義明の末弟岡崎四郎義実は、中郡岡崎に移住し、三浦氏の威勢は相模大半に及んだ。

源家の三浦氏に対する信頼も厚くなり、頼朝は嫡男義平の養育を、三浦義明に依頼したほどであった。

治承四年（一一八〇）、伊豆に流されていた源頼朝は、以仁王の令旨を受け、安達九郎盛長をして平家追討の旗上げに協力するよう各地の豪族のところへ派遣した。

盛長は幾多の難渋に相手にされなかったが、衣笠城に到着するや、三浦義明は病の身ながら正装して迎え、旗上げを落涙して喜び、協力を約束したという。

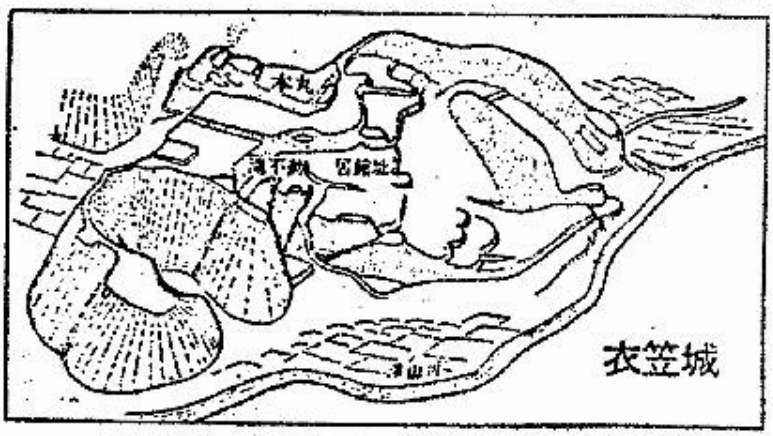
翌年八月、源頼朝は伊豆にて兵を挙げ、山木判官兼隆を血祭りにし、三浦氏と合流するために石橋山へと進んだ。

これに対し、平家方の大庭景親らは、三千余騎をもって石橋山を包囲した。一方、頼朝を援助するため衣笠城を出た三浦義澄以下三百余騎は、はじめ海路を進もうとしたが、風雨激しく、これを断念し、陸路を夜を日に徹して進んだが、途中丸子川（いまの酒匂川）の洪水にあって阻止され、ついに石橋山合戦に間に合わず、頼朝の敗北を聞き引き返した。

鎌倉まで戻ると、そこには平家方の侍畠山重忠の軍勢五百余騎が、由比ヶ浜に陣を張っていた。

謀志をもてあました三浦党は合戦をしかけて戦ったが、畠山重忠は三浦義明の外孫で、両家姻戚の故をもって、和議が成立し（小坪合戦）、三浦党は衣笠に帰城した。事情を聞いた党主三浦大介義明は、畠山勢の来攻を予知して、全員衣笠城に結集するよう命じた。

畠山重忠は、父重能が京都で平家に仕えており、このままでは平家の聞え、武門の恥になると、相武の軍勢三千余騎を率い、小坪合戦より二日後の八月二十六日（『源平盛衰記』のみ八月二十七日と記す）、衣笠城を攻撃するのである。当時十七歳の若武者畠山重忠を総大将とする三千余騎の軍兵は、二手に分かれて衣笠城を囲んだ。搦手（大手）は河越重頼、江戸重長ら、搦手は畠山重忠という。守るは三浦党のほか、千葉常胤の弟金田小大夫頼次の手勢七十



余騎を含わせた総勢四百五十三騎である。東木戸口(追手)には三浦義澄、佐原義連など。西木戸口（搦手）には和田義盛、金田頼次らが控え、さらに中陣には長柄義貞、大多和義久が守備にあたった。中陣は予備隊であったらしい。搦手は自然の利を得た要害で、馬の足立ちが悪く、畠山重忠はただ、城内兵力の分裂を策して戦わなかったようである。

衣笠城合戦の模様は『源平盛衰記』に最も詳細に物語られているので、これに従って述べてみる。追手先陣の総党二百余騎は勇んで攻めたが、城内ではすでに準備のうえ、よく防戦したので、総党は敗散の体で引き返した。ついで金子党三百余騎が攻め、党主金子十郎家忠は進むを知って退くを知らず、一の木戸、二の木戸をも打ち破って進んだ。これを望見した三浦党主義明は、家忠を賞賛し、酒を贈ったという。そして義明は和田義盛を呼び寄せて家忠を射るように命じた。強弓で知られる義盛の矢は狙い違わず家忠に命中し、家忠はどっと落馬した。これを見た家忠の弟金子余一は、傷ついた兄を負って退いた。家忠の首級をあげんと駆け寄った三浦余一は、金子余一を追い、余一同士の戦となった。相さみえるうち、ついに金子余一が、三浦余一の首級をあげた。この状況に、三浦義澄は、城を離れず敵を引きつけては戦うという消極的な戦法をとった。だが父の三浦義明は坂東武者の習いとして積極的戦法を強く主張し、自ら馬に跨って戦おうとした。義澄はその不利なことを説き、いきり立つ父を制止した場面もあったという。その後は大きな戦いもなくやがて日も暮れ夜となった。党主義明は一族を集め、源頼朝が石橋山の戦いに敗れたとはいえ、再挙を図るべく、安房に落ちたことを説いて聞かせた。三浦党はこれより間道から城を脱出し、急いで安房へ渡るように命じた。しかし義明一人、八十九歳の老齢にもかかわらず最後まで城に踏み止まり、城を枕に討死するという悲壮な決意を示した。かくて城を抜け出した三浦党は、久里浜より船出し、海上にて頼朝の乗った小船に遭遇し、安房に上陸した。わずか主従七騎で落ちてきた頼朝にとって、この三浦党四百騎はどんなに心強かったことだろう。一人残った三浦義明は身辺を整理し城内で自刃したとも、城外に出て江戸重長の手勢に討たれたとも書かれている。

この衣笠城合戦の壮絶を考えてみると、すでに源頼朝と三浦氏との間には旗上げの打ち合せができていたと考えられる。頼朝が石橋山合戦に敗北したとき、安房へ落ちることを知っていた三浦大介義明は、衣笠城によって敵の目を衣笠城に引きつけ、頼朝の安房落ちを安易ならしめるため、殉制の役を演じようとして大芝居を打ったのであった。したがって衣笠城合戦では、戦さに勝つことが問題でなかったから、各支城に兵力を分割して損傷を大きくせず、衣笠城で全員一丸となって戦ったのである。石橋山に源頼朝を敗った平家方の待大庭景親ら三千余騎は、衣笠籠城を聞き、海岸線を切り上げて衣笠に向かったが、すでに城は落ち三浦義明討死のあとであった。安房へ渡った源頼朝は勢力を盛り返して鎌倉入りをするのであるが、三浦義明の嫡孫和田義盛が侍所別当という重職に任ぜられたのは、頼朝のために死んだ三浦義明の恩徳に、頼朝が報いたためであった。

鎌倉幕府が開かれると、三浦氏は一族要職を占めたが、北条義時の策謀によって和田一門が滅ぼされ、三浦氏も七代泰村に至り、北条時頼が執権となるや、将軍頼経の退位に端を発し、陰謀もあって宝治元年（一二四七）六月五日、鎌倉西御門の三浦館を不意に襲われ、泰村ら一族郎従五百余人は、頼朝の祖る法華堂にて自害し、三浦氏は滅亡した。この宝治元年をもって衣笠城とその支城は廃城となった。三浦為通より七代泰村まで、衣笠在城は百八十余年の歳月であった。しかし佐原義連の孫盛時は北条方に味方したため、三浦介を許され、三浦半島南部を領して新井城を築いた。

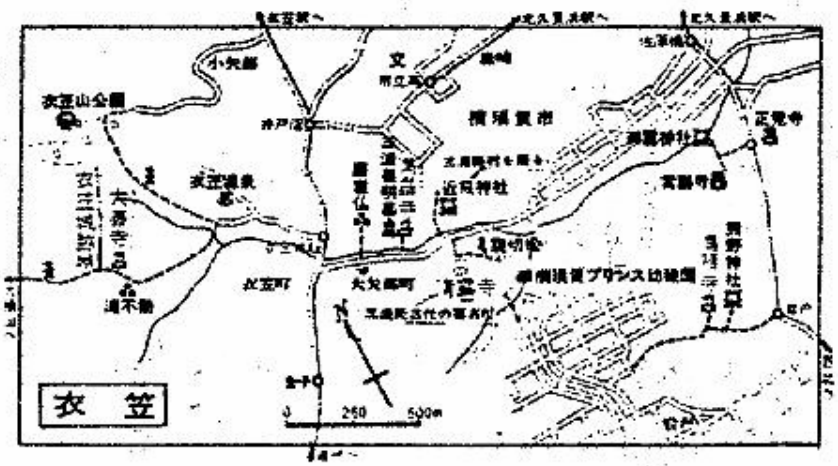
現在の衣笠城は、東に突き出した先端の山で、山裾で東西六百五十メートル、南北三百五十メートルあり、主要部は百三十メートル四方、追手水田面よりの標高七十五メートル、鎌倉期の城郭としては実に広大である。北に大谷戸川、南と東に深山川が流れて自然の堀をなしている。南北は急峻にして西は谷、東の一方のみゆるやかな傾斜地となって搦手に連する。最高部は西に高くなり物見岩という

う大岩がある。大正八年（一九一九）、城址を公園にする際、工事中に物見岩の下より刀剣、合子、経筒、水入などが出土し、現在東京国立博物館に保管されている。現場に遺物発掘碑が建っている。物見岩のあるところは西方岩山との間に堀割を残し、いわゆる詰めの場所で、堀に囲まれていたものと考えられる。東北に突き出た御雲社のところは遠平を望む要地である。三浦家信仰の蔵王権現社跡もある。二段目の大善寺のある平場は城内で一番広く、現在道路となっているところは空堀跡らしい。南西隅には小さな土塁が十メートルばかり残っている。大善寺は行基菩薩の開基であるから、衣笠時代にも存在した。三段目の平場もかなり広く、滝不動という当時の石井戸が残っている。現在でもこの辺の飲料水に使われている。井戸の東側農家のあるところは居館跡である。三段目平場にはこのほか、旗立岩と称する岩山と、東南には高さ二メールの土塁が東西に延びている。三段目までが主要部である。

単に衣笠城というと、いま述べてきた衣笠山に構えられた城をいうのであるが、広義の衣笠城をさすとき、それは支城を含めて森崎、小矢部、平作、大田和、大矢部、佐原と衣笠城を馬蹄形に囲む範囲内をいうのである。三浦半島の最高峰大楠山を主峰とする大楠山地は、東に延びて平作、大田和、大矢部、佐原から千駄ヶ崎で終わっているが、途中平作より支脈を分岐して森崎で終わっている。また原始時代には久里浜湾の入海は公郷まで達しており、地震と堀立てとによって現在の地形となったが、少なくとも衣笠城時代の森崎、佐原の裾は海に洗われていたのである。したがって、広義の衣笠城とは、この佐原の海を正面にし森崎、小矢部、平作、大田和、大矢部、佐原の山々に囲まれた大馬蹄形城郭のことであって、鎌倉城は三方山に囲まれ由比ヶ浜を正面とした。この馬蹄形城郭としての衣笠城は、鎌倉時代に完成されるのであり、名城とよばれるゆえんもここにある（赤星直忠著『三浦半島城郭史』）。

衣笠城で討死した三浦大介義明の墓は、大矢部町満昌寺にある。源頼朝は、義明の十七回忌に衣笠へ赴いて菩提を弔い、山号を義明山と改めさせたという。その際、頼朝は「義明は今もなお生きている」といったことから、義明の死んだ八十九歳に十七を加えて「三浦の大介百六つ」という俚言が生まれ、広く親しまれている。満昌寺境内には、願懸持ちが下をくぐるとなおる、という「頼朝手植えつつじ」や『三浦氏系図』、『衣笠古城図』など、義明の遺物を蔵している。背後の御影神社は和田義盛の創建で、源頼朝作と伝える義明坐像を安置する。その裏に瓦屏で囲まれたのが大介義明の首塚である。満昌寺の南東清雲寺には三浦為通、為継、義継三代の五輪塔と和田党九十三騎の墓がある。その北東の薬王寺跡には、三浦義澄の墓が民家の傍に眠っている。

（金原　七）



御浦　ミウラ　相模国に御浦郡ありて、和名抄に美字良と註し、郡内に御浦郷を收めて美字良と訓ず。御浦氏は姓名録抄等に見ゆ。大田部直の後か。以下大姓号類。

三浦　ミウラ　相模に三浦郡あり、別称御浦郡に属ぜ。其の他、伊豫等にも此の地名あり。

1　桓武平氏　相州野崎の大族にして御浦郡名を負ふ。桓武平氏と云へど、或は古代、御浦郡の豪族の後にて前称御浦氏なれか、大田部姓参照　其の系図の諸説一致せざるものの多きは後世の偽作なるを示すものに非ざるか。

三浦氏系図

鎌倉分脈に「高望王」

良文―義澄―義明―義村
　　―忠光―桓高―胤義
　　―忠道―孝輪―為綱（三浦平太郎）
　　―為道（三浦平太郎）
　　―為基（上座）
良茂―良正―公義―為次―義次―義明
　　―義澄
　　―義宗―義澄―義村―泰村
　　―義秀
　　―義宗―義澄―義村―泰村
　　―義秀
　　―重義（二郎）
　　―信義―信連
　　―常盛
　　―義秀

とも。また

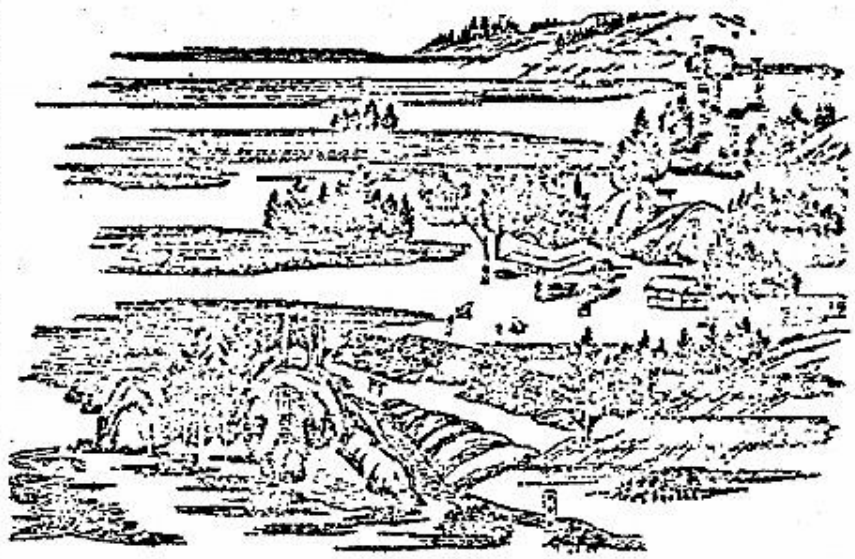
桓武平氏系図には「良文―忠頼―忠通（村岡五郎）―為通（播磨中将）―為直（三浦平大夫）―為継（三浦平六郎）―義継（三浦平六庄司）」と載せ、諸家系図集には「良文―忠光、弟忠道（一説は忠光男）―為通（始めて三浦と称す、三浦平太郎、長門守、従五下）―義澄（平太郎）―義明（三浦大介）」と見え、井田系図に「為通（三浦平大夫、長門守、播磨中将）」と。

三浦氏系図

次に三浦系図には「忠通―為通（平大夫、長門守。此の時始めて三浦と称す。一説）―平太郎為継（弟に駿河守為俊を数む）―義継（庄司、介、女子一人は大友四郎経家妻、又弟に安西四郎を数む）」

義明―義宗―義澄―常盛
　　―義行
　　―為清
　　―義賢
　　―義澄
　　―義春
　　―義久
　　―義秀
　　―義連
　　―重行
　　―女子
　　―女子
　　―女子
　　―女子
　　―女子
　　―女子
　　―有澄
　　―義村（駿河守、平六兵衛尉）
　　―胤義
　　―義有（胤有）
　　―高義
　　―胤義
　　―女子
　　―家康
　　―重胤
　　―胤氏
　　―胤盛
　　―康盛
　　―義氏
　　―胤義
　　―重澄
　　―重村
　　―氏村
　　―村氏
　　―泰村
　　―光村
　　―駒王丸
　　―泰盛
　　―行村
　　―行綱
　　―義信
　　―朝盛
　　―朝綱
　　―玄鳳
　　―竹吉丸
　　―松乙丸
　　―三郎
　　―行村
　　―女子
　　―汝村
　　―駒孫丸
　　―資村
　　―家村
　　―女子
　　―長村
　　―頼村
　　―胤村
　　―頼村
　　―良胤
　　―蓮野
　　―女子
　　―貞村
　　―有村
　　―孫松丸
　　―虎駒丸
　　―椎村
　　―家村
　　―貞村
　　―朝村
　　―良村
　　―義盛
　　―義継
　　―良義
　　―安村
　　―宗義

衣笠城跡圖



○衣笠古城　村の中程にあり、山城なり、麓より登ること三町頂上に金峯權現社あり、此所本城の跡と云南へ下ること若干歩にして平地あり、こゝを二丸の跡と云、則箭敷不動の堂地なり、東面を大手口と云り、當城は三浦氏累世の刺據にして、其祖三浦平太夫爲通後長門守に任ず、康平年間初て爰に居城し、其子平太郎義明相模介となり、三浦庄司と稱す、已上大菩寺縁起、并系本等に所見あり、義明の子大介義明に至るまで相續て居住し、治承四年八月頼朝義兵を擧るの時平家の方人畠山次郎重忠・河越太郎重頼・江戸太郎重長等當城へ押寄せ、合戦に及しに城兵敗れ、義明の子義澄已下一族郎黨城を出て逃去り、義明當城に止り討死す　【東鑑】曰、治承四年八月廿六日、武蔵國畠山次郎重忠、且爲報平氏重恩、且爲奪由井浦合戦、欲滅三浦之輩、仍相具當國黨々、可來會由、觸送河越太郎重頼、是重頼於扶父家雖爲次男、相經家督、從彼黨等、江戸太郎重長同與之、今日卯刻、此事風聞于三浦之間、一族悉以引籠于當所衣笠城各張陣、東木戸口大手次郎義澄、十郎義連、西木戸、和田太郎義盛、金田次郎頼次、中陣、長江太郎義茂、太多和三郎義久等也、及辰刻、河越太郎重頼、中山次郎重實、江戸太郎重長、金子村山黨以下致千騎攻來、義澄等雖相戦、唯今兩日合戦、力疲矢盡、臨午更捨城逃去、欲相具義明、義明云、吾爲陣家第

代家人、率遂于其貴種將軍之代也、盛衰之義、所保已八旬有餘也、計餘算不長、今投老命於戎場、敵寡不敵、復多軍之勢、今念遂生分、可奉事彼存亡、吾病殘身于越鄙、復多軍之勢、今見重瞳、云々、義盛以下、沛然雖失度、任命懸以越盛、廿七日、三浦介義明年八十九、爲河越太郎重頼、江戸太郎重長等被討取、餘人命餘、依無人手扶持也、『源平盛衰記』曰、義澄義盛、小坪軍に打勝て、三浦に歸、軍の次第、こまゝと語ければ大介義明云けるは、「敵は一定明日寄べし、急ぎ衣笠に引籠て軍せよ」といへば、義盛申けるは衣笠は馬の足立よき所なれば寄手の爲には便あり、急に逃落されなん、叔母の城は、三方は石山高くして馬も人も通ひ難き惡所なり、一方は海口に逆を一つ開たれば、よき者一二百人あらば、從敵何萬騎寄たり共、樣く貴落すべからずと申、大介頂て申、叔母と云は僕の小所、人是を知らず、衣笠こそ聞へたる城よ、三浦の者共は小坪の軍に打勝て、懸衣笠に引籠て、敵々に寄て討死しけりといはゞ嗚呼さる名譽の城あり、其はよき所也と人も沙汰すべし、叔母城にて討死といはゞ、叔母とはどこぞ、未知と云れんこと面目なし、たゞ衣笠に籠れと云て、義盛が云けるは、叔母も三浦も持御領内也、就中軍と申は身を全ふして、敵に物惡はせ、目敵をへて戰ふこそ面白けれ、衣笠に籠りたり共、やがて追落されなば、無下に云甲斐なし、能々御計候べしといへば、大介頂を立て、「やをれ義盛よ、今は日本國を敵に受たり、身を全せんと思ども、何日何月か有べき、樣命生べく共、人のいはんずる事は、三浦こそ一旦命を延んとてさしもの名所を圖て、叔母城に籠たりけれと、沙汰せん事も口惜し、若又百人が中に一人なりとも生殘て、佐殿世に立給ひたらん時、父や祖父が惡所とて、知行せんにも、衣笠こそ知たけれ、軍と云は、所にはよらず手がら謀に依べし、荒野の中にて戰とも、よくゝひしらはゞ不可負、石の根に逆たり共、惡く戰ならば、殺叶、命惜くば軍たせぞ、などや己は惜には惜ぬ、且は父の命也、老者の云言は聞ぬ、義明は只一人也とも、衣笠にて討死せん、敵よせずば餓死にも、彼にてこそ死なめと、大に嗚り云ければ、力及ばず、係引つれて、衣笠の城に籠にけり、上總介弘經が弟に、金田大夫と云者は義明が軍なりければ、七十餘騎を引率して、同城に籠にけり、有合勢僅に四百五十三騎ぞ有ける、大介下知しけるは、木戸を三重にこしらへべし、敵は軍の法なれば、定て追手搦手二手に分て寄べし、追手の方には道を遮れ、廣さ七八丈に不可過、寄二疋ばかり通る程に遮れ、搦の片方は沼なれば、兎角するに及ばず、片方には大堀をほれ、道をば三重に掘切て、一の堀には橋を渡くわたせ、中堀には逆橋を渡せ、三の堀には逆木を引、堀ごとに板塀を掻へ、櫓をかけ、弓よく射者共は、矢倉に上て、敵の寄の寄板を蹴て射よ、又歩走の者共は、角きわりをこしらへ置、杜打の奴原は、西の方の小竹の中に籠り居よ、小竹の中より道へ向て縄道を遮れ、敵一の橋を打渡て、二の橋まで寄るならば、角きわりを以て、馬の太腹を射られて靜ならば、曽我者左右の脇と沼とへ、はれ落されてをきんとせん處を小竹の中より杜打の奴原つと出て、杜鵑そろへて熊者をば打殺せ、賊武者共をば死ぬる程に打成て、生殺にして紋行せよ、各不怠すなとぞ下知したる、廿七日の小坪軍の後、中一日ありて、廿九日の早朝、河越次太郎、江戸太郎、畠山庄司次郎等、大將軍として金子村山口荘、鬼王・樣山、丹藤をし、惡を始として、三千餘騎衣笠の城へ發向す、追手は河越、搦手は畠山、二手に分て攻寄つゝ、時の聲三箇度合にためらふ處に、樣の一類、貴家の眷屬三人まで、小坪の軍に討れて、不安思ければ二百餘騎先陣に進て、木戸口近く

攻寄たり、城の内には籠城の上侍共一騎々を主付て、差詰射けるに、馬共いさせて、はね落されて、深田に落入、あがらんとしける處を、小竹の中より杖打の冠者原、鼻を壹て組伏より出て、打殺し、差殺して、乘替武者等多く討れて、生る者は少かりければ、段籠も引退く、金子十郎家忠と名乘て三百餘騎入替々戦ける中に、人は退ども、家忠は不退、一二の木戸口打破て攻たりける、甲冑に矢の立こと廿一、拵かけ〳〵貫入つゝ、更に退事なかりけり、城の中より提子に酒を入て、林も たせて出しけり、大介家忠が許へ申送けるは、今日の合戦に武藏相模の人々多く見え給へ共、貴殿の振舞ことに目を驚し侍り、今は定てつかれ給ぬらん、此酒のみ給て、今ひと際興ある樣に軍したまいと、云遣たりければ、家忠林軍三度飲て此酒飲侍て力付ぬ、城をば只今貰落し給るべし、其意を得たまいとて、使をば返めけり、軍陣に酒を送は法也、城場に酒を請は禮なり、義明の所領と云、家忠の作法と云、興あり思ありとぞ、皆人申ける、十郎ふし親目鎧に三枚甲の緒をしめ甲の上に腐黄の胴巻打かづき、楯の本まで責付たり、大介云けるは、真金子は大剛の者かな、射つべき者はなきか、惜き者たれ共當の敵なり、射留よとぞ下知しける、三浦別當申けるは、和田小太郎は、弓勢も矢音もはしたなく候、彼を召て仰たべとぞ申、大介小太郎を招てあの家忠射留よと云、傳承ぬとて、楯に上て見れば、十郎二段ばかり隔て、永平を廻し、次第々に費寄て、諸の内へはれ入らんとする處を、和田小太郎義盛十三束三伏しぼし引て、落矢に兵と放つ、金子が甲に懸たりける腹巻の一の板甲の鉢かけて射貫き、頸の方により頸の下をつと通り、胄の打板のはた板鎧に、ぞ射付たる、痛手なれば少しもたまらず、どうと倒る三浦の郎等、落合て頸をとらんとする處に、金子與一つとより、肩に引懸、木戸口の外へ出けるを三浦與一追て懸る、除に手しげく追ければ、金子與一、十郎をば打捨て、太刀を捨て組合て打て懸る、與一と與十と立合て太刀打にこそ戦けれ、三浦與一不叶と思て、かいふつて逃けるを、金子與一追付て、三浦與一を懸き倒して首を切、敵の頸を手に提げ、十郎を肩に懸て、陣の内にぞ入にける、武蔵国者共入替々戦けり、三浦別當下知しけるは、城の内を不隙して、よせん敵を引請々射よ、與一も長追して疲れこそ討れぬれ、身をたばひて、敵に背を思はせよと云ければ、大介是を聞て、若者共が軍の樣こそをかしけれ、何の料とて、命をたばうべきぞ、坂東武者の習として、父死れ共子顧ず、子討れども親退ず、乘換乘換敵に組て勝負するこそ軍の法と、きれば廿騎も卅騎も馬の鼻を並て進つゝ、案内もしらぬ者共を、思所へ追請々、笑たるこそ面白けれと云けれ共、別當は尭程もなき勢を以て、かけ出んず事あしかりなんとて、不出けるを、大介公けるは、陸奥こそ出給はずとも、いでて義明かけ出て、最後の軍して見せ奉らんとて、雑色二人に馬の口引せ、既に打いでんとしける子息の別當、馬の口に取付て、如何に角ばおはするぞ、其御座にて打出給たらばなんぞ、何の益にか立給ふべきかと云ければ、大介はやをれ義澄よ、武者の家に生て軍するは法也、敵の鋒に向て命を惜むは人なちず、軍と云はかけ出かけ出追つ返つ、敵も味方も隙のなきこそ面白けれ、そこのけ殺原とて、鞭を以て打けれ共、甲を打ばいたからず、別當馬の鼻を取て城の内へぞ引もて行、日も漸暮ければ各軍に疲つゝ、邪の外に弱々しく見えければ、大介子孫郎等呼居へて云けるは軍はすべき程はしつ、人の笑れぐさにはよもならじ、佐殿御心賢き人にて御座は、よく計れ給はじ、安房上総の内にぞ御座らん、相構て味参り、君に力を付奉て平家を亡し、佐殿を日本の大将軍になし進ぜて、親女が墓所也とて、我所をも知行して、我本領に得させよ、但義明をば公に捨よ、只身々を助て命に落よ、我既に老ぬせり、

行ゆにし不叶、島にも乗得がたし、我を勞具せんとせば俱に悪かるべし、遂得ずして打捨なば、無益の耻を見るべし、とく落行け、我をば此に留置、老は悲しき物也けりとて置垂の袖を絞りければ、家子も郎等も、我を捨てぞ叫ける、さても大介は捨よ〳〵と云けれ共、子孫名殘惜ゆつゝ、輿を寄て具し申さんと云れ共、大介終に乗ず、諸除以下の子孫は、笑をば捨て、投々主君を求て、宮中に乗籠の御輿に出て、遠に乗て安房方へ落行けり、其外は三騎五騎、ぬけ〳〵に落失ける、中に年頃の郎等共の有けるが、主の名殘を惜み、手輿にのせて泉て出づ、大介云けるは、我は子孫に暇を一此にて死する者なり、いかに角はするぞ、只捨て行とて、扇を以て測泉共を打けれ共、一里許ぞ泉もて行、殿近付ければ輿を捨て逃げるを、殿の下部ども乗て衣裳を剥取りければ、己等に逃て名乗べきに非ず、知らねばかく振舞か、汝は三浦大介と云者ぞ、角なせぞ角なせぞと云けれ共、赤裸にぞはぎなしける、大介は哀同は高山にきらればや、親子孫也其ゆかりむつまじと思けれども、高三尺五寸、高なる江戸太郎に被斬にけり、城蹟の東方に古墳あり

行、一上に五輪塔四基あり、相傳て義明一家の墓なりと云、寿和元年六月頼朝此邊遊覽の次、義明の舊蹟を歴覽せらる【東鑑】曰、寿和元年六月十九日、武衛爲被遊覽、渡御三浦、彼司馬一族等、皆且有結構之儀、殊申宴内、令到于義明舊蹟給、義澄稽顙酒宴、殊盡美、酒宴之際上下沈酔、其後、大蓮寺移建曰、御願所衣笠城、義明の舊蹟に入御あり、其老者の當城陥せし年代詳ならず、○最光寺蹟　村の中程にあり、洞一今野比村にあり、

○金峯藏王權現社　祭神安閑天皇なり、日本武尊を合祀す、天平元年の勅請と云ふ、（縁起の略に曰、天平元年行基作り、金峯權現を勧請し、當郡行脚の時、場を此地に建て郡中の鎮守とす、）祭禮九月十日別當大善寺、△末社御嶽　建久五年九月廿七日勧請す、三浦大助義明の霊を祀ると云、○伊勢宮　○秋葉社　○第六天社　○住吉社　已上共に村持、

○○不動堂　衣笠城蹟に在、像は行基作、長三尺、倚執不動と號す（縁起に曰く、三浦長門守爲通、衣笠に居住し、信崇して城内の鎮護とす、源義家奥州の役に爲通の子平太郎爲總從軍し血戰せし時、此像形を現じ、敵の放つ箭を執て力を戮す、因て倚執不動又倚除明王とも稱す、）天正十九年十一月堂料二石の御朱印を賜ふ、△不動石像　城蹟の麓御手洗池の中にあり、御不動と稱す、又此地より東方三町餘、大矢部村境に、前不動と號す石像あり、

○△別當大善寺　金峯藏王權現の別當を兼、金峯山不動院と號す、（行基作、元小矢部村大松寺末、本尊阿彌陀、長三尺、開山微岸和尚、寛永四年十月十日卒、）

○清月寺　義明山と號す（初は雲山と號す）臨濟宗（倉建寺末）寺末本寺（寶延年中改む）、冠禮を安す、當寺は建久五年九月頼朝三浦大介義明追福の爲に草創せられ【東鑑】曰、建久五年九月二十九日、三浦矢部郷内、可建立一寺之由思召之、爲被訪故介義明没後也、今日御神宮詣終其地、義明を開基となす（法號清月寺義明）治承四年八月廿七日卒す、俗姓あり、中興開山祥廣（寺記に曰、字天岸、武州人、姓伊氏、弘安九年冬、剃髮受戒、元之安定中西渡、本朝元德元年歸朝、建武二年三月八日寂、）の時清家となり、建長寺末に屬す（從より已前の宗派詳ならず）天正十九年寺領三石の御朱印を賜ふ、△御靈明神社　境内鎮守なり、建暦二年和田左衛門尉義盛建つ、大介義明の靈社なり、其背後を置く（寺記作、長二尺九寸、其國左に載す、寛延二年三浦志摩守義次等修飾を加ふ（再興往來銘曰、義明公之靈御造作始例、居我三浦末裔、志州太守義次公、爲五壁爲其後者七八家、致力營緣再興、時寶暦第廿六、寛延二年小春、義明山清正寺住僧心雲建、此時社傍を穿て、鎮帷子を得たり、大介着用と稱して今に寺寶とす、△五輪塔一基　社の背後にあり、大介の首塚と云ふ、是を墓院と稱す、△松樹　神木なり周丈、△鐘楼　享保十七年の鑄造の鐘を掛く、○藥王寺

佛頂山と號す（臨濟宗、建倉寺末、本尊は藥師なり、當寺は建暦二年和田左衛門尉義盛、父移本太郎義宗叔父三浦平義澄等菩提の爲に創建する所なり、今義澄を開基と稱す（義澄は義明の二男なり、長次郎と稱す、正治二年正月二十三日卒す、禪師に十月十八日に作るは誤れり）又義宗の靈を置く（佛頂院義宗大禪定門と號す、義宗は義明の長子なり、長寛二年卒す、中興開山大本禪師（名度、中峯山と號す、號長大禪師）に嗣法す、康永三年二月六日寂す、の時清家となれり（此已前の宗派詳ならず　△三浦介義澄墓　本堂の西北に在り、

○

○清雲寺　大雲山と號す、臨濟宗（倉建寺末）寺末本尊毘沙門を安す（和田の戰に、義盛の爲に故の矢を請しとて矢部の毘沙門と稱す、立像長二尺五寸、）開基は三浦平太郎爲繼なり（天仁元年七月廿二日卒す、清雲寺天山爲繼、大禪定門と號す、長嶺郡郷は奥州後三年記に見へ、中興開山大雄清普（康永廿四年六月八日寂す、）の時臨宗を改て今の宗派となれり、天正十九年十一月寺領二石の御朱印を賜ふ、三浦正統系圖一卷を收む、三浦志摩守誠次、三浦長門守の家より納むと云ふ、△三浦平太郎爲繼墓　本堂の背にあり、五輪塔（高六尺）なり、

佐原三浦氏の興亡

1　三浦盛時の台頭

宝治の合戦に依り、頼朝以来、鎌倉幕府の要職を占め勢力の有つた三浦党も、宝治元年北条氏の為に逐に滅亡した。其の中で三浦党佐原義連の孫五郎左衛門尉盛時兄弟三人は、之謀に加担せず、北条に味方して功有、其の功により三浦氏の旧領の南一部を与えられ三浦介を許さる盛時新井城を築き本拠となし、三浦介を継。（油壺と小網代湾の間に突出した岬）

2　三浦介時継の返逆

元弘の乱の時、「相州兵乱記」「鎌倉管領九代記」によると、当家は三浦大介義明・其のかみ右大将家に忠勤を尽せしより以後源家累代の重臣として此処の主領となり、一門の大名・地頭諸国の受領九十三人、門司すでに五百余人、扶桑一州の間に、誰か軽んじめ思はんや。

然る処、中古元弘の乱世に、三浦介時継入道・即ち相模二郎時行に与し（元弘二年尊雲法親王還俗して護良親王の令旨？）幕府に反逆を企てたが尾州の熱田にて生捕られ、六条河原に於て誅せらる。其の子三浦高継は高倉の恵源禅門に与して討れしより此の方、門族衰へ、威勢傾きけれども、猶今に相州の内比肩する者無し」と。

3　元弘三年鎌倉攻

元弘三年（一三三三）鎌倉攻めの時、三浦介高継北条氏の無道を怒りて帰順し、大介職以下所領前代の如く旧跡を安堵す。

其の後足利氏の起るや、逐に之に属し、墨後鎌倉管領家に隷属すと。

4　足利持氏を誅す（永享の乱）

永享の乱の時三浦介時高此の城に拠す。永享八年（一四三六）八月、足利持氏武州高安寺へ動座ありけり、時に留守警護之事、先例に任せて時高に命ぜらる。時高近年領地少く軍兵も少なれば、不肖之身として如何んとも叶ひがたき旨辞し申しけれども、厳重に命ぜ被しかば、先々命に従ひきれず思ひき。時高思ひけるに、先祖三浦大介右大将家に忠有りしより、以来代々功を積て、御賞翫事之他也。然るに当代に至つて出頭人の覚を他に取られ、兼々面目を失う処、無念に思けるに、持氏郷、内々勅命に背きぬれば、京都より三浦介が方に御内書下被れたるに依り忽に逆心し当城へと乃帰れり。

去る程に十月京都より討手の勢、下りたれば時高、大将として二階堂の人と一味同心して

大御所へ押寄攻ければ、持氏叶はず逐に永安寺に入り自殺して終りぬ。是により時高其の軍功他に異なればとて、忠賞有る程に一門繁栄富貴日頃に越へたりき。

而して鎌倉大草紙に、三浦備前守、三浦二郎左衛門等を戮せ、又

相州兵乱記に「三浦介逆心の事」を載せ「三浦介時高・二階堂の一流と引合いて、鎌倉へ押寄す」と

5 三浦時高と義同父子の背反

新井城には二つの合戦記録がある。一つは、家督相続からの戦い、今一つは、北条早雲、関東制覇の野望による戦である。

三浦介時高は盛時より八代、永享乱には足利持氏を滅亡に追やる勇将の一人であつたが、彼に男子無く其の系絶えなんとす。之依り一門なればとて上杉修理亮高救の二男を養子となし義同と名付けて一跡を与えんとす。

彼の義同器量並びなく、才覚人に超えければ郎党供を始め、三浦の一門是を持て成しける処時高晩年に至りて実子出来ぬ。高救と名付けて大いに喜び養育し、家督を継せんと欲す。

時高は義同が邪魔になり、折にふれ面目無く当りければ、家老の面々諫めしかども、用いずして、後には近従の者に申付け、義同を討つべしと下知しければ、義同不和を避けて、相州西郡伊勢原総世寺に引籠り、髪を切つて僧の姿となりにき。

之依り三浦の一門・被官の者供、時高の作法義に背けりとて、三浦を退き、義同入道道寸の跡に集り総世寺へこそ籠りける。

去る程に、義同が勢程無く大勢に成りし上、小田原の大森式部大輔・箱根別当等皆親しき一門なれば皆加勢合力ありぬ。明応三年（一四九四）九月二十三日の夜、当城へ押寄せ夜討にぞしたる。

城中思もよらぬ事なれば、周章す、中村民部少輔走り廻りて是を見て、此は如何に父に弓引く八逆の罪人ぞや、汝等が武運忽ち尽きぬべしと切て出て討死す。其の間に三浦介初め一族若党皆自害して滅びぬと。

6 三浦義同の滅亡

北条早雲岡崎城攻、「相州兵乱記」に「三浦義同討死の事」相州岡崎の城主三浦義同後に陸奥守入道して道寸と云う。文武二道の良将也。其の子荒次郎義意後に弾正少輔と云うを三浦新井城に籠め、吾が身は相州中郡を知行して、威勢近辺に双びなし。

岡崎の城と申すは、昔頼朝公の御時、三浦大介義明の弟岡崎悪四郎義実が住せし城とぞ聞へし。三浦一門数代住みし処、要害きびしく支度せり。義同・義意隣交の盟厚く、相武の兵供多

く集り来て相従う。

北条早雲は関八州を制覇の野望を抱き、大森氏を追放して小田原城を乗取った。相州の大半に威を張る三浦氏が邪魔になり、小田原の北条早雲は如何にもして三浦を責落して相州平均に治めばやと、永正九年（一五一二）八月十三日伊豆・相模の勢を催し、岡崎城へ押寄せたり。三浦義同・佐保田豊後守以下、奮戦良く護り切つて出て合戦するも逐に落城す。

逃げる義同を追い、住吉城に踏止まるを、攻め落し、新井城迄押進む。

新井城攻め、

永正九年岡崎城落、住吉城も続いて落城するに及び義同当城に落来りて、息義意と共に新井の城に楯篭る。早雲聞て当城へ押寄せる。然し乍ら三方海、自然の要害堅護な新井城を力攻めに出来ず、向城を攻取りて食責めとはなせり。之に依り持久戦の策として爾後三年の歳月を要せり。

此の間早雲は、江戸よりの三浦が援軍に備える為鎌倉の北に玉縄城を築きける。上杉修理大夫朝興是を聞きて三浦落去せば難儀なるべしと、人数を出して早雲を追払うべく、義同に力を附さんものと当国中郡へと旗を向られけり。早雲聞て中郡へ押寄、入替々戦いければ、上杉勢敗北して江戸を指して引入れたる。

かくて三年、新井の城中には、矢種尽き兵糧減じて、近日落去有ぬると覚ける程に、永正十三年（一五一六）七月十一日今は之迄と城より打て出て、開門して合戦に及び、寄手の先陣を三町斗り追立攻めまくる、八十五人力と云われる三浦義意の奮戦するや、北条方皆退きて義意に立向う者無し、此の時北条方の勇士四人勇を奮つて打向い危うく義意に討れる所義同其の勇に感じて助言するにより命を助けらる。合戦終りて後其の徳に感じ此の者達切腹して殉じたと云う、今義士塚と云うは之也と。

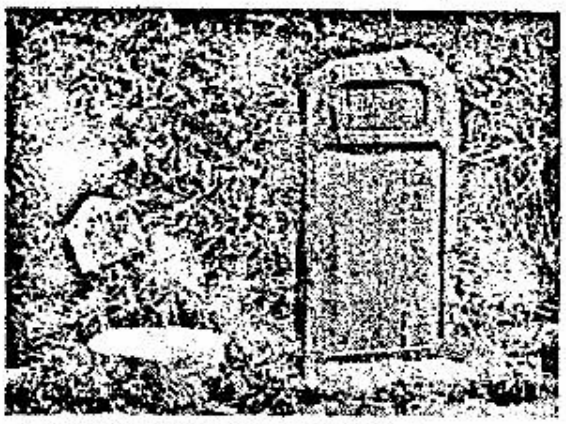
かくて義意二十一歳にて腹掻切つて自刃し、一族皆枕を並べて討死すと。

義同は「うつものも　うたれるものも　かわらけよ　くだけて後は　もとの土くれ」と辞世を詠じて、静かに自刃したと云う。

此の時城兵の多くは油壷の海に身を投じて果てたので、海の水が血潮で油の如くなったので油壷の名があるとも云う。

此の戦が三年も続けられたのは、城中に千駄矢倉と云う洞窟有り、米千駄入ると云はれ、充分なる食糧が貯えられていた為であるが、三年にも渡る篭城に使い果した。

永正十三年の合戦で自決した三浦義意の首は小田原迄飛んで行き、松の枝に懸り、眼を見開いたまま形相もすごく、三年の間往来の者を苦しめたと云う。岡崎の総世寺四世忠室和尚が「うつつとも　夢とも知らず一眠り　浮世のひまを　あけぼのの空」と詠ずると、眼を閉じて成仏せりとの伝説有り。



玉縄城址　大船市・早雲の前線基地であった。

早雲の鎌倉入りと相模平定

相模最大の豪族三浦義同（道寸）は、扇谷持朝の子の高救の子であり、彼自身扇谷家の出身であったが、道灌の誅殺によって、扇谷家に反感をもっていたらしい。彼の娘は、道灌の子資康の妻であった。しかし両上杉氏の和睦成立後は、彼はおしもおされぬ上杉方の重臣であった。自分は岡崎城を守り、その子の義意は新井城を守っていた。

永正九年（一五一二）、早雲は、もう八十一の老年であったが、「いかにもして、三浦を攻め落し、相州平均に治めばや」と闘志をもやしていた。

八月十三日、早雲は、伊豆・相模の軍勢をひきつれて、まず道寸がたてこもる岡崎城を攻め立てた。早雲方の三浦の旗と、道寸方の中白の旗とが入り交って戦ったが、道寸は敗走して、三浦郡の住吉城（飯島）に逃げた。江戸城の扇谷朝興は、道寸を救うために出撃したが、逆敗して江戸城ににげ帰った。そこで早雲は、八月十三日に鎌倉に入ることができた。鎌倉に入った早雲は、「枯るる樹にまた花の木を植えそへてもとの都になしてこそみめ」と詠じたという。まことに意気さかんな早雲の歌ではないか。これ以後、鎌倉は、後北条氏の支配下に入ることとなる。この年の十月、早雲は玉縄城（大船市）を築いた。玉縄はいまや、早雲の前線基地となった。

永正十年（一五一三）九月二十九日、道寸の女婿太田資康は、江戸城を出て三浦郡で早雲の軍勢と戦い、敗死した。資康は、両上杉氏の和睦後は、江戸城に迎えられて、扇谷朝良・朝興に仕えていた。資康のあとは、資高が家をついでいる。翌十一年（一五一四）、勢力を挽回した三浦道寸は、鎌倉を攻めたが、早雲は、これを撃退し、新井城に追いかえした。早雲は、これより三ヵ年間、道寸を新井城に釘づけにしてしまった。早雲は、この点でも、けっして深追いして、むだな損害を出すようなことはしなかった。

永正十三年（一五一六）、江戸城の扇谷朝興は、道寸を救援するために、ふたたび玉縄に兵を動かした。早雲は、これを撃退し、急転して、いよいよ新井城を一挙に攻めることにした。朝興の出陣は、三浦氏にとっては、逆の効果となってしまったわけである。

七月十一日、道寸は、家臣らが上総への逃亡をすすめたのにもかかわらず、「微運の我ら、何ほどかのがるべき。犬死せんよりは、命の限り戦して、弓箭の義を尊らにすべし」と新井城を打って出て、父子ともに枕をならべて討死したという。相模の豪族三浦氏は、こうして滅亡してしまった。

新井城址　三浦半島油壺

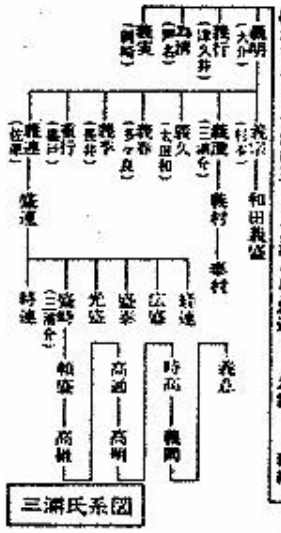
新井城は三浦半島の先端に近い油壺湾と小網代湾の間に突出した岬にあり、その岬全体が城郭仕立てになっていた、なかなかの堅城である。落城のとき、二十一歳の若武者義意は白鞘の棒をふりかざして奮戦したという。その義意の墓は、いま水産高校の近くの樹下にある。そしてその墓から左に小路を下ったところに義同の墓もある。このあたりから木の間がくれに油壺の海が見えるが、新井落城のとき、城兵たちの血潮が流れて海にそそぎ、海面が油のようになったという伝説がある。その名のとおり、波ひとつない静かな海である。

三浦氏が早雲と数年にわたって対抗できたのは、三浦氏の背後に、上総・下総の在地武士とその海軍力があったからである。とくに上総の真里谷氏の娘は、義意の妻であり、早雲もこの背後関係を知っていたので、新井城をいそいで落そうとしなかったのであろう。思えば、明応四年(一四九五)の小田原城占領より三浦氏の滅亡まで、早雲は、相模平定に、じつに二十ヵ年を費している。早雲の大器が思われるであろう。

三浦一族

三浦氏の始祖為通が、この衣笠の地に館を設けたのは、康平6年(1063)源為義の奥州征討後のことである。戦功の恩賞として従五位に叙せられ、三浦地方の土地を賜わったのだが、なかでも衣笠は三浦半島のほぼ中央に位置し、水田地帯を控え、しかも交通の要衝でもあり、鎌を置くには格好の地の利を得ていたといえる。以後、三浦一族の衣笠での統治は為継、義継、義明と4代にわたって百十数年間、治承4年(1180)の衣笠城落城までつづくことになる。

ところで、平安末期の社会は大きく変貌をとげようとしていた。武士階級の台頭がそれである。保元・平治の両乱には三浦氏は直接の動きはしなかったが、源頼朝が伊豆で挙兵すると、時の城主三浦大介義明は、ただちにこれに応じた。そして、平氏の側についた、畠山重忠をはじめとする軍勢を、わずか450余騎で迎え討ち、一歩もあとに引かなかった。だが、頼朝の石橋山の敗戦を聞くにおよんで、次男の義澄や孫の義盛らを安房へ逃がし、自分は城と最後を共にした。頼朝はのちに義明山満昌寺を建て、その功を称えたという。鎌倉幕府の有力御家人となった三浦氏は、やがて北条氏に滅ぼされるが分流は義同までつづいた。P93参照。



新井城跡　市内小網代。

油壺と小網代両湾を隔てる岬の先端部一帯で、三浦氏殺戮の場として知られている。

三浦氏は源家再興の功で鎌倉幕府の要職を占めたが、宝治元年(1247)北条時頼によって鎌倉法華堂で滅亡した。しかし一族の佐原盛時らは北条氏に味方したため旧領をゆるされ、三浦介を継ぐこととなり、その本拠として築いたのが新井城である。

盛時から8代、三浦介時高は、永享ノ乱(1438)で足利持氏を滅亡に追いやった勇将の一人だったが、男子がなかったので上杉修理亮高救の2男義同を養子に迎えた。のち実子高教が生まれたため義同との間にかくしつが生じ、明応3年(1494)新井城で義同に討ちとられている。

三浦介を継いだ義同は、永正8年(1511)新井城に長男の弾正少弼義澄をおき、岡崎城(伊勢原市)に進出したが、翌9年、岡崎城は小田原の北条早雲に攻められて落城、北条軍は逃げる義同を追って新井城にきっとうした。しかし3方を海に囲まれ、自然の利に恵まれた新井城を抜くことが出来ず、持久戦に入った。

兵糧のつきた三浦勢が決戦に出たのは、3年後の永正13年7月11日で、北条の大軍の前に全滅している。この合戦で城兵が油壺湾に多数投身し、血のりで水が油のようになったので、この名が付けられたともいう。

のち城は北条氏の持城となり、天正18年(1590)の小田原落城で廃城になった。

今も油壺の入口、歓迎アーチのある南側には高さ約3mの土塁と幅10m余りの空堀が残っている。本丸は岬の南部、現在東大臨海実験所の寄宿舎のあるあたりで、その北側、激戦が展開された二ノ丸の跡は、京急マリンパークとなっている。

マリンパーク前から駐車場の間を北へ入った木立ちの中に三浦荒次郎義意の墓、ここから左へ細い道を30mほど下り、右へちょっとあがった岬の北端に、三浦道寸義同の墓がある。いずれも天明2年(1782)、三浦氏の後裔にあたる三浦長門守・正木志摩守らが建てたもの。

義同の墓碑には、「うつ者もうたるるものもかわらけよ　くだけてのちはもとの土くれ」という辞世が刻まれている。

義同の墓の前をそのまま下ると"胴網ノ浜"と呼ばれる砂浜で、荒次郎が自刃したとき首が小田原へ飛び、胴体がここへ落ちたという伝えからこの名がある。

油　壺　市内小網代。逗子・横須賀駅からバス、油壺入口乗りかえ、油壺下車。

市の西海岸には、風景のよい小さな湾が数多くある。油壺もその一つで、これはすぐ北隣にある小網代湾、南の諸磯湾と同様に、浸食谷の沈降によって出来たものである。

湾内がいつも油を流したように静かなところから、油壺の名がある。

奇岩・怪石が清らかな潮の流れにあらわれ、突出した半島部には常緑樹が茂り、箱庭のように調和して美しい風景を見せている。

海岸沿いは浜遊びがてらの家族ハイクによく、湾内はヨットハーバーに利用されている。岸辺や海岸に面した山腹には有名人の別荘も多く、そのモダンな建て物がエキゾチックな姿を呈している。

むかしはここに新井城がおかれ、北条早雲に滅ぼされた三浦道寸一族の悲話が、今も語り継がれている。

三浦荒次郎義軍の墓

新井城

①荒井城 ②三浦市三崎町小網代 ③城郭 ④——
⑤鎌倉幕府 ⑥空堀、土塁

衣笠城とともに三浦氏の壮烈な最期の場として知られる新井城は、三浦市三崎町小網代にある。夏には絶好の避暑地として海水浴やヨットで賑わう風光明媚な油壺がそれである。

鎌倉幕府の要職を占めた三浦一族も、北条氏のために宝治元年（一二四七）、滅亡したが、一族の佐原盛時兄弟三人は、北条方に属していた。そのなかでも盛時は手柄があったので、旧領の一部（三浦半島の約南半分）を与えられ、三浦介を継ぐことを許された。そこで新たに本拠としての城郭を構えることになった。それが新井城であろう。

むかしを偲ぶ新井城

新井城には二つの合戦記録がある。ひとつは家督相続からの争いである。盛時より八代三浦介時高は、永享の乱（一四三八）には足利持氏を滅亡に追いやった功将の一人であった。かれは男子がなかったので上杉修理亮高救の次男を養子として義同と名づけた。しかし晩年になって実子高教が生まれたため、時高は義同を邪魔者扱いにした。義同は不和を避け、思案の結世寺に引き籠ってしまったが、義同を慕う家臣たちが義同のところへ集まって、しきりに帰城をすすめた。小田原の大森氏は、義同の母の実家であったので、義同は大森氏の援助も受けて明応三年（一四九四）九月二十三日、やむなく義父時高を新井城に攻め討った（新井城については、この家督争いから明応二年に時高が、義同の来攻に備えて築いたとの文書もある）。

名実ともに三浦家を継いだ陸奥守義同は、永正八年（一五一一）、従四位正少弼義意を新井城におき、自らは中郡研崎に居城して、勢力拡大を図っていた。大森氏を追放し、小田原城を奪った北条早雲は、関八州を制する野望を抱いていたので、相模一円に眼を張る三浦氏が邪魔になった。永正九年（一五一二）、岡崎城に三浦義同を攻めてこれを落とし、逃げるのを追って住吉城をも攻め落として新井城まで進んだ。しかし三方海に囲まれ、自然の利を得た新井城を力攻めにはできず、持久策をとって三年間を費した。この間、北条早雲は鎌倉市北端に玉縄城を築いて、三浦氏の援軍に備え、応援にきた上杉勢を敗走させた。さらに早雲は上杉氏の破壊工作を進行させ、いよいよ新井城は孤立状態となった。城内には千駄矢倉という洞窟に、十分の兵糧が貯えられていたが、三年もの籠城に使い果たし、永正十三年（一五一六）七月十一日、ついに開門して合戦に及んだ。八十五人力といわれる三浦義意は、城を出て奮戦しての ち、自ら二十一歳の命を断った（義意は、村井弦斎の「桜の御所」の主人公である）。義同は「うつものも うたるるものも かはらけよ くだけて後はもとの土くれ」と辞世を詠じて、静かに自刃した。

この合戦の際に、城兵が油壺湾に多数投身して、水は油のようになり、また北条方の勇士四人は、義意に危うく討たれるところを、義同の助言により助けられた。それゆえ、その徳を感じ合戦後に四殺して殉じたという。その墓が義士塚だと伝えられる。新井落城後、三崎城を守っていた出口五郎左衛門尉茂忠は、あくまでも北条早雲に抵抗し、城ケ島に籠って北条氏を悩ましたが、雑兵、円覚両寺の仲

介により和議が成立し、三浦水軍は北条水軍となった。義同の子時綱（時高の子という説もある）は海路安房に逃がれ、里見氏に仕えて正木大膳亮と称し、代々勇猛をはせた。三浦義同が、再起を図るため安房に逃がれず、新井城にて壮烈な戦死を遂げたのは、三百数十年前、衣笠城で討死した三浦大介義明の精神が、そのままに、受け継がれていたものであろう。その後、新井城は北条氏の持城となった。弘治二年（一五五六）九月、里見氏の来攻には、北条方が大敗し、里見氏は三浦半島を占領している。『房総軍記』によれば、「里見は三浦四十余郷の地を再び取り返し、荒井の城を取り立て、里見右京を城代とし、山本清兵衛、山田左衛門、堀内平内、板倉十平治を添えて之を守らせた」（大野太平著『房総里見氏の研究』）と信じがたいが興味深いことが書かれている。天正十八年（一五九〇）の北条氏滅亡とともに廃城となった。

現在県立三崎高校のあたりを引橋とよんでおり、台地の切れ目が東西に谷状となっている。北条早雲の進撃に対し、橋を引いてくい止めたという、新井城の第一防備である。三崎高校の東方畑地を陣場と称して、北条早雲の陣営跡といわれている。新井城は北を小網代湾、南を油壺湾、西を相模灘に囲まれて三方絶壁をなし、東のみ陸続きとなっているところが幾重にも深く掘り切られ、島城ともいうべき城を形成している。しかし、一番が海蝕台地であるために、城内と城外は同じ高さの平坦地で、城内に高いところがないのは欠点である。終点油壺でバスを降り、道路を先に進むと左に観光船中込小屋があり、その裏は堀切りである。道路は堀切りの中央を埋め立てており、ここには内の引橋がかけてあったという。堀切りに面して城内側には高さ三メートルの土塁が残っている。虎口の片方の土塁で、もう一方は崩されている。その十数メートル下に、小さい平場と土塁があり、海岸岩づたいにくる敵に備えての防御線である。南側の新井浜へ至る道は空堀跡で、右には三メートルの土塁、左には低い土塁の壁土が断片的に残っている。しばらくいくと右に空堀があり、両側は土塁である。『三浦半島城郭史』は、この堀は本丸と二の丸を区分して、中ほどの出張ったところに高櫓があったであろうことを推定している。本丸は現在、東京大学臨海実験所の寄宿舎になって、立入りを禁じられている。二の丸は合戦場の跡であり、北隅に三浦義意、一段下がって義同の墓がある。

永正十三年（一五一六）の合戦で自決した義意の首は、小田原まで飛び、松の枝に懸り、眼を見開いたまま形相ものすごく、三年間ものあいだ往来者を苦しめたという。そこで結世寺四世忠室和尚が

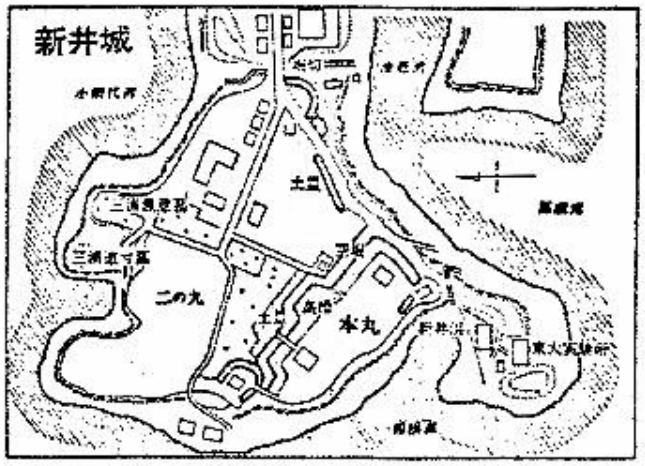
「うつゝとも　夢ともしらず　一ねむり　浮世のひまを　あけぼのの空」と詠じると、眼を閉じて死んだといわれる伝説がある。義同、義意の墓は、天明二年（一七八二）に正木忠摩守、三浦長門守の三浦氏後裔が建てたものである。

（金原　仁）

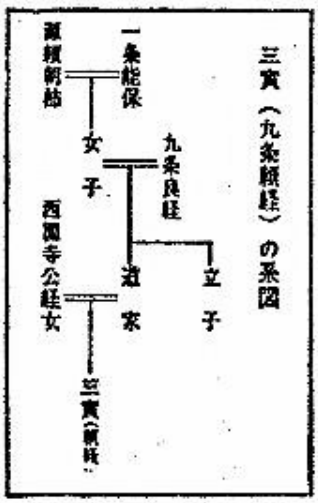
「三浦介時高此城に居る。永享八年八月足利持氏武州高安寺へ動座ありける時、留守の留之事先例に任せて時高に命せらる。時高近年頗地少く軍兵もなけれハ、不肖之身として如何にも叶ひかたき旨辞し申たれとも、戯迷に命せられしかハ先々命と従ひき。時高思ひけるは先祖三浦大介右大将家に忠有りしより、以来代々功を積て御代数他に率也。しかるに当家に至て出頭人に党を取られ、兼々面目をうくのふ所無念に思ひけるに、持氏卿内々勅命に背きぬれハ京都より三浦介か方へ御内書を下されたるによって、怒に逆心の当城へ乃帰たる。去程に十年京都より討手の勢下たれハ、時高大将として二階堂の人々一味同心して大蔵御所へ押寄攻けれハ、持氏叶ハす遂に永安寺に入て自殺したる。是より其軍功他に異なれハとて忠賞ありし程に富貴日頃に越へたり。されとも男子なかりしかハ其家既に絶へなんとす。是に仍て上杉修理亮高数の子を養子にして義同と名付て一跡を与へんとす。然るに時高晩年におよひて実子一人出生したれハ無て義同を追出して、実子に家督を与へんと思ふ心の付ける。されハ折にふれて面目なくなりしか、後には近臣義同を討べきよし下知しければ、義同は三浦をしのび出、当国西郡諏訪原結世寺に引籠て会下の僧之すかたに成ける。是によって三浦の一門被官皆時高を背て義同を尋て結世寺へそ集りたる。去程に義同か勢程なく大勢に成し上、小田原の大森式部大輔、箱根別当抔も皆加勢合力ありしかハ、明応三年九月廿三日の夜当城へおし寄夜討にそしたる。城中にハ思ひ寄らさる事なれハ、三浦介を初一族若党皆自害して滅ひたる。斯て義同は

其子荒次郎義意を此城に籠め、吾身ハ岡崎に居住して有りけるか、永正九年八月北条早雲岡崎城を攻落せし間、義同当城へ落来て父子共に籠城。早雲間に当城へ押寄向城を取て食せめにせられける。上杉修理大夫朝興是を聞て三浦落去せは程義なるへく、人数を出し早雲を追払、義同に力を附んとて当国中郡へ鎧を向られける。早雲間に中郡へ押寄入替々攻戦けれハ上杉勢悉く敗北して江戸を指て引入たり。斯りしかハ矢部原合戦後で、近日落去有ぬと覚けるほとに、十三年七月城中より打て出寄手之先陣を三町斗り追立攻まくり枕をならへて討死す（按九代後記以此城籠及義意等敵死保二十五年四月一朱知熟是從二小田原記二）早雲ハ此城をせめ取て後、義同か残党を召出し横井越前守（初称神助）大将として小林平六左衛門等に是を守らしむ（按小田原記云早雲攻二岡崎城一義同ヲ妨ヲ不能支迫保ヲ住吉城早雲進攻て亦不能守遂に三浦城に走ル又云博台役ニ足利義明為三浦一城代横井神助射殺蓋此城在三浦故に又云三三浦城一耳非一有二二城一也）。

（『諸国廃城考巻六十四新井城』）

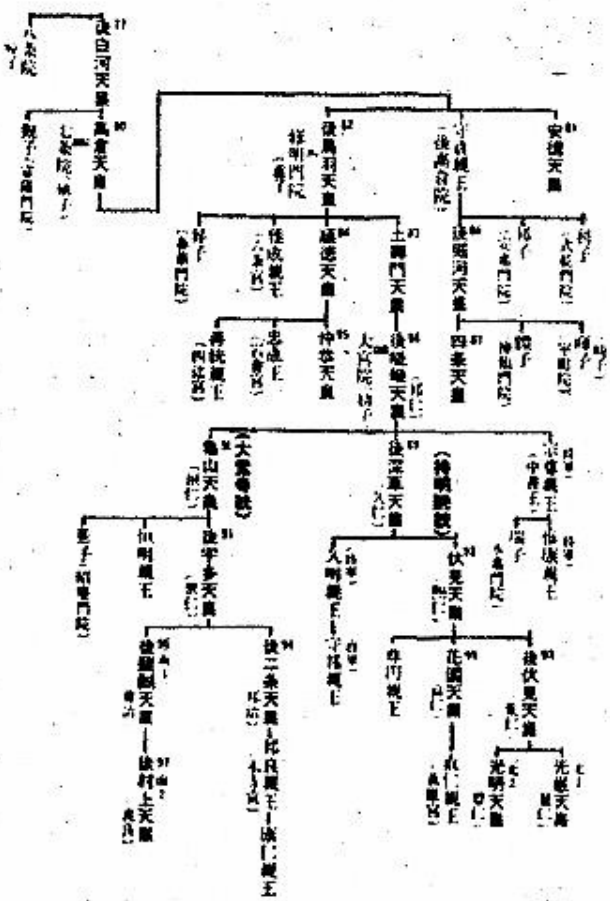


鎌倉将軍頼経の系図

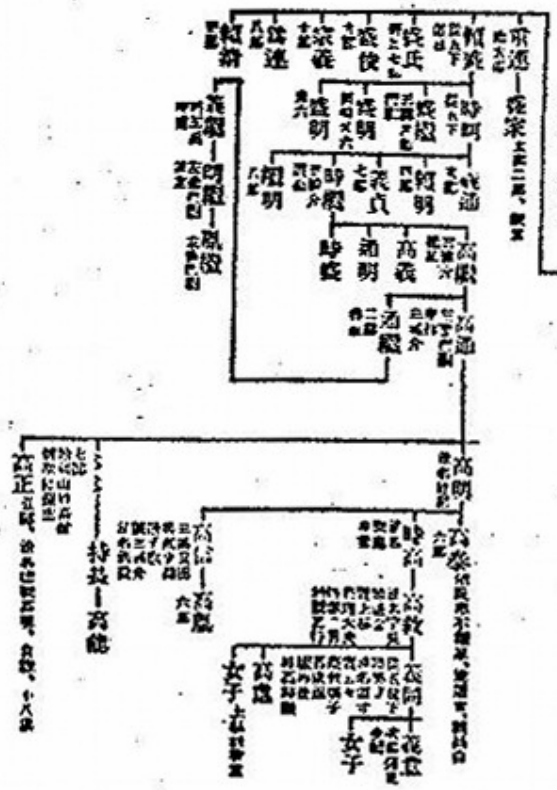


天皇家系図

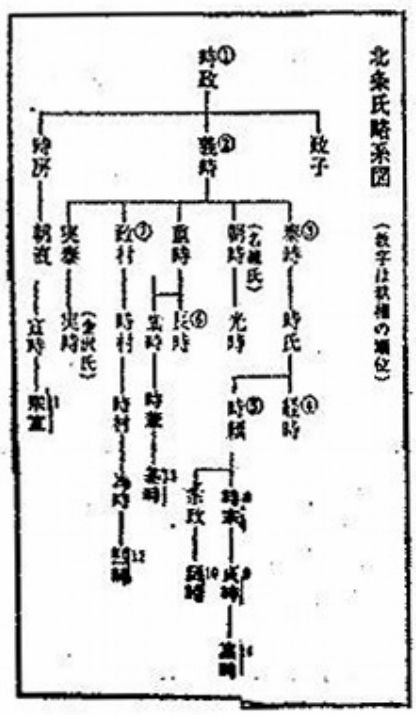
天皇家系図（数字はいわゆる天皇現代数）



佐原三浦氏系図（姓氏辞典）



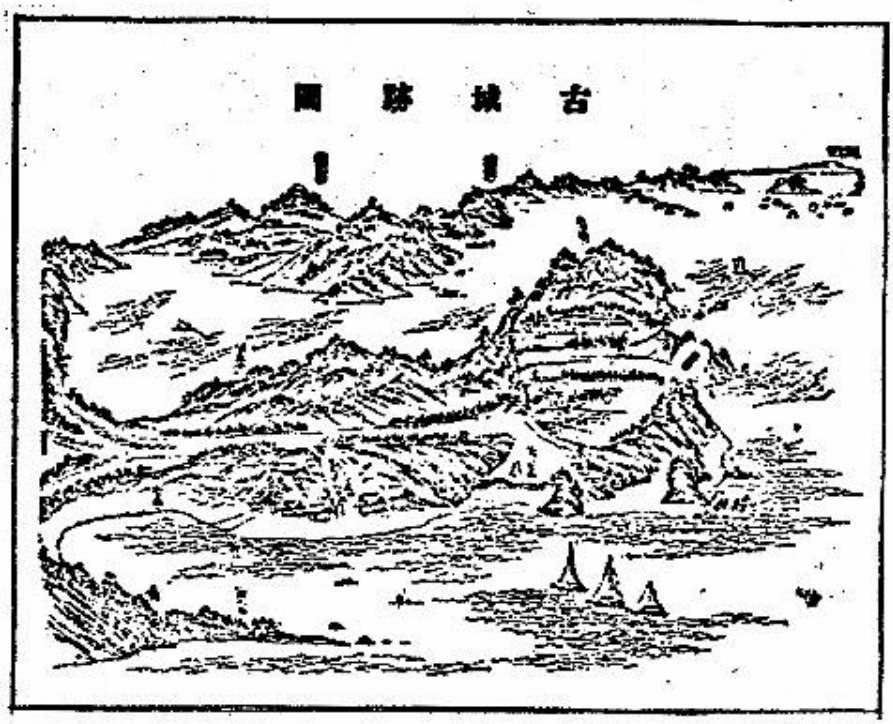
北条氏系図



三浦半島観光地図

新編相模國風土記稿卷之百十三

○新井古城　小名荒井にあり、城地の形狀東を首とし西を尾とす、北は綱代濱南は油壺の入江にして海中に突出せること三十町許、闊七八町或は十町【管領記】に、遠江五代記【には廣三十町四方とあり、】東の一方のみ陸に接す、則大手の跡にして其地を引橋と號す　當時大手の堀に引橋を架したる故に此名殘れりと云、古外濠あり、籠城の時橋を引、或發して海水を湛ふれば樹域一箇の島嶼となれり【北條五代記】に、北城は西北は入海、白波立て岸を洗ひ、山高嶮峻嶮にして、歩も踏り難し、東一方は二十間程陸続き、是に堀を掘、門一つ建立すれば、百騎千騎向ふといへども力責にはなりがたし、其是島城なり、【鎌倉九代記】に、此城の有樣、四三十條町を堀こめ、東一方はかりこそ陸に繋きけれ、三方は入海の島城にて、白浪岸をあらひ、峯高き羊腸の山坂、鳥たらでは翔り難く、嶮そばだちたる、鹿角の嶮き嶮といへども、通ふに、其地形陸より是を見れば渺々たる平原にして海より望めば百雉の郭郭なり、外郭は總て白田となり、歩手の形少く存す、内郭の堀に荒城あり【五六間】、北所々内の引橋と號す、北の方は二丸の跡なり、長百二十六間横百二十四間、又も陸田を開き字合戰場と稱す、四邊土居の遺形あり、此所より北荒堀を隔【四間】、越て本丸に至る、又は芝原にして築垣の形狀尚存す、長六十五間横四十二間南隅に松林あり、御庭の松と稱す、抑當城は三浦氏累世割據の處なり、永享の頃三浦介時高城主として足利持氏に仕へ、同十年二階堂の人々と一味して持氏を亡す、明應三年義子新介義同と不和に依て父子合戰に及び、九月廿三日時高當城にて討死す【小田原記】に、明應三年三浦介時高入道と、子息新介義同と不和の合戰ありて、父時高怒に討れにけり、其敵如何にと問に、荒年永享の從に時高公方持氏を滅し申、其軍功他に異りとて、忠賞あり、しかに三浦家絶なんとす依之一門たればとて、上杉修理進高救の息男を養子として義同と名付、一跡を與へんとす、かの義同器量尋ねなく才學人に越ければ、郎等どもを初め三浦の一門、是をもてたしなける故に、時高晩年に及て實子一人出來りぬ、時高夫婦大に喜、是を養立て、家督を繼せ、猶子義同を遠出さばやと思ひけれども、義同は少も恐に不出、孝行をなしをとたしやかに振舞ける、宗老面々此樣不可然と、時高を諫めしかども、不用して後には近邊に在住侍に申付、義同を討べき由下知しければ、義同逃懐して髮を切て三浦を忍出、相州西郡瀧沢原建世寺へ引籠て、會下僧の樣に成ける、依之三浦の一門被官の輩、心ある輩は時高の作法義を背けりと、爪はじきをして多以て三浦を退き、義同入道の跡を尋て建世寺へこそ籠りけり、去程に義同が勢、無程大勢に成と聞へけれども義同の實母は大森實頼の女にて、小田原の大森式部大輔とも筑摩別當とも號き一門なれば、此人人より加勢合力ありしかば、義同統勢を振ひ三浦へとつてかへし、父時高が籠りける新井の城へ押寄、明應三年九月廿三日夜討にこそしたりける、城中には敵よるべしとは思もかけず、弓矢して居たりければ、寄手乘内なれば、安々と乱入てときの聲を上げる程に、こはいかにと周章す、中村民部少輔とて相模國梅澤の住人なりしが、走廻り是を見て、こは如何に父に向て弓を引八逆の罪人ぞや、汝らが武運盡て逃べしと罵り、切て出て討死す、其間に三浦介一族若黨侍自害して滅びにけり、此時高主君を殺奉り、其忠賞に蒙りしが、吾子に討れて亡びにける、斯て義同三浦介となり、後に建世寺入道道寸と號す、其子荒次郎義意【後輝正少弼と號す】を當加に籠め、吾身は岡崎城に移、居住して上杉氏の命に隨ふ、永正九年八月北條新九郎入道早雲の爲に岡崎を責落され、當城に落來て父子共に籠る、其後早雲當城に押寄せ、向城を取て三年まで食攻にせしかば城中兵粮盡き、同十五



年七月十一日義同父子郎黨已下百餘騎打て出て、悉く討死す　又曰、相州岡崎城主三浦介義同、後には陸奥守入道道すと云、文武二道の良將なり、其子荒次郎義澄を三浦新井城に籠め、吾身は相州岡崎に居住して、管領の命に隨ひ、相州中郡を知行して、威勢近邊に無雙、小田原早雲如何にもして三浦を責落し、相州平均に治めばやと思はれければ、永正九年八月十三日、伊豆相模の勢を催し、岡崎へ押寄たり、三浦介佐保田豐後守以下切て合戰す、遂やぶれん、さしも堅固の三浦介敗々に打破られ、城の籠手より落て同國住吉城に籠り戰ける、其後赤住吉をも落されて、三浦の城へ落行、度々人衆を集て合戰に及しかども、一陣破れぬれば殘黨不全、度々に打勝ことなし、遂に有て鎌倉へ出陣しけるを、早雲聞あへず押寄て責たまへば、敗々にかけまけて、三浦へ引返す、小田原勢追かけ〳〵責ければ、三浦陸奥守父子新井城に籠こもる早雲三浦へ押寄向ひ城をとりて、三年まで攻ぜめに責たまふ籠る勢ども兵粮盡果て、上杉朝良の後詰を賴しに、上杉打負ぬと聞へければ、こはいかにと仰天す、早雲は上杉を押挫ひ新井の城を責落さんともみければ、城中の兵ども大森城長守、佐保田河内守、陸奥守の前に來て申けるは、敵已に後詰の軍に打勝て押寄へば、遂に落、居有ぬと覺て、然らば忍て城を落、上總へ御渡り、荒次郎の別、鎌倉谷城を賴み、軍勢を促し三浦へ歸り、北城を取べき謀あまたあり、二年の間をば過べからずと申ければ、陸奥守是を聞て申けるは、當家は三浦大介義明頼朝に忠を盡して討死せし後、累代北所の主として、一門大名諸國の守護九十三人、門葉百司五百人、然る處に中頃元弘の亂に、三浦介時儀入道時行に與して、初て逆心を起し、熱田にて生捕られ、六條河原にて討れ、其子高綱高

倉殿の過心に向じて、討れて已に衰え勢少くなり行けれども相州には盾を並る人なし、然後父時政不義の振舞して持氏を亡し申、其忠賞にほこり又大名と成しかども、其御討にや、吾等等を催して此城へ責来て時高を亡し吾を追出し給しに、吾等等又其報恩来て所こそ多きに、父のうせし此城にて義同又失なんとす、是天命にあらずや、運已に盡ぬる上は、たとひ落行たりとも数運の吾等、何程か逃るべき、犬死せんより命を賜の戰して、弓矢の義を専にすべし、運の通塞も家の吉凶も、年可訓處、一足も引まじと、夜もすがら最後の酒盛し明る永正十三年七月十一日、辰の刻に打て出、小田原の先陣を二町許進立切まくり、扶をならべて討死す、三浦同孫奥守従四位下平義同、子息弾正少弼従五位下平義意、井家掃大森遠江守、佐保田河内守、同孫四郎、三須三河守以下、百餘軍の屍は、「瓦港の浜に敷、血は満長城の窟、されば今に至るまで、其怨霊此所に留り、月曇り雨暗き夜は、叫喚求食の聲して、「野人村老の毛孔を寒からしむ、其後録年七月十一日、荒井の地に亡霊ありて、往来の人のうつゝに見え、言をかはすこと度々なりとかや、「北條五代記」曰、道寸は至剛智謀武勇せし大将たりといへども、鎌倉合戰に人数悉く討れ、小勢なれば叶ずして、三年能城す、終に兵粮米つきはてぬれば、城中の者共種義に及ぶ云々、門を開き切て出討死すべきか版を切べきかと詮議し、今生の名残只今なり、酒を飲んと道寸霊をひかへ給ひければ、佐保田河内守君か代は千代にや千代とうたふ、荒次郎扇を取て、君か代は千代にや千代もしやたゞ、現のうちの夢のたはふれと舞給へば、孫四郎も同く立てつれて舞ふ、貴にあはれなる一曲なり、時刻を移さず門を開て切出る、神谷孫兵衛と名乗て道寸を目かけ駆寄て上にて押並てむずとくむ、道寸は聞ゆる大力にて、敵の両輪にをし付、ほそ首打切て捨られたり、荒次郎は家「傳はる重代、五尺八寸の正宗の大太刀をぬき持て大勢を立切てまはる有様鬼神の如し、様又道寸はすきの道とて、生害にいたりて、討るゝものも討るゝ者もかはらぬよ、くだけて後はもとのつちくれとよみ切腹し給ひぬ、荒次郎は二十一歳、部屋付侍人にすぐれ、長七尺五寸、黒髭あつて血眼なり、手足の筋骨あらくして八十五人が力をもてり、最後の合戰の爲成し立たる甲冑は、鉄をきたひ厚さ二分にのべ是を帯し、自歴の丸本を一丈二尺につゝきり八角にけづり、筋がれをわたし、此棒を引さげ、一人門外にゆるぎ出たる有様、夜叉羅刹の如し、敵おめきさけぶ聲、太山も崩れて海に入、坤軸も折て忽に沈がごとし、四方八方へ散る者を追詰、甲の頭上を打ば鎧摩に摧け、脇へ入、横手に打ば一枠に五人十人打ひしぐ、棒にあたりて死する者五百餘人、其屍は地にみちて、足の踏所もなし、此城に若敗北して、敵もたければ自ら首をかき落し死たりけり、されども首は死せず眼はさかさまにさけ、鬼髪は針をすりたるが如く、牙を噛しばり眦つめたる眼の光、百れんの鏡に血をそゝぎたるが如く、おそろしさを一目見たる者なられつすれば此頭又も見る人なし、是によつて有驗の貴僧尊僧に仰て、さま〳〵の大法祕法死せられけれども其驗なし、三年此首死せず、小田原久野の總世寺の禪師、来て一首の歌を詠じたもふ、うつゝとも夢ともしらず一ねふり、浮世のひまをあけぼの、涙、とよみて手向たまへば眼ふさがり、忽肉朽て白かうべと成ぬ、此荒次郎死所のあたり百間四方は、今に草をいて、田畑も作らず、草をもからず、牛馬共中に入て草をはめば、悉に死す、故に際までもよく知て其中へ入事なし、常に青草茫々と生たり、當代の侍衆新井の城見物せしに道寸父子は名誉の武士一魂とて、敵の大手の右脇の外にて下馬しぬ

義す、此合戦と申は七月十一日なり今も七月十一日には所平
新井の城に雲霧おほひて、日の光も定かならず、北の方と
赤申の方より雷かゞやき出て、南方光入雲風猛火を吹上、光
の中に異形異類の物有て、手戈をみたし、虚空に兵船雲霧
天地をひゞかし戦ふ有様、おそろしきと云ばかりなし、故に
此古城のあたりには、人家もなし、一里ばかり隔れて村里見
えたり、道寸の討死は、永正十五年戊寅の歳七月十一日の寅
の刻なり、後ずるに【小田原記】【北條五代記】年月異同あり、
道寸の墓碑に曰く、【五代記】伝たりとすべし、此後北條氏の持城となり、天正十
八年小田原落去の時、永く廃城となりしなり【北條五代記】【秀吉軍
略】相模国の條に、郡八州にて新編る
城々には、新井三崎云々と見ゆ、　△千駄矢倉　本丸の
巽隅崖下にある洞なり、油壺入江に面す、洞中廣六七
坪、高一丈二尺、横二間半、深三間、道寸兵粮を貯置し所と云、【北條五代記】に、道寸三年
熊城す、彌るに千駄矢倉と號し、大なる岩穴あり、是に當に
米穀を千駄積置、此穴の内も件はらつて兵粮米遣果ねれば、
城中のもの難義に及ぶ云々、按ずるに洞を
矢倉と號するは、鎌倉三浦邊の慣語なり、　△辨天窟　千
駄矢倉の南峭壁に在磯石を刻て階段を造り、昇ること
十間許、洞の深十間餘廣一間、奥に石像の辨天を置、妙
法院持、△三浦陸奥守義同入道道寸墓　二丸の北隅に
在、碑は天明二年建、碑面従四位下陸奥守道寸義同公
墓、永正十五年寅年秋七月十一日討死、謚號永昌寺殿道
寸義同公大禪定門神儀及辭世の歌を鐫る　うつものもり
たるゝものも

かはらけよ、くだけて
後はもとの土くれ、　碑陰に天明二壬寅秋七月、永昌九
世正碑、願主化縁二造立、施主正木志摩守・三浦長門守・
杉浦出雲守・松平縫殿助・松平縫殿頭家臣松本文左衛門
奈良長滅と鐫る、△三浦彈正少弼義意墓　道寸墓の東
に在、碑面大乗院殿玄心安公大禪定門墓、碑陰に富寺
開基三浦前陸奥守道寸公嫡子、彈正少弼荒次郎義意公
刎所、地頭松平縫殿助地所寄附、天明二壬寅稔七月十
一日、綱代山海藏禪寺智玉叟代造立と鐫る、△義士塚
外郭引橋の邊にあり、北條早雲の家士四人の墓なり、
相傳ふ荒次郎義意最後の籠城に、敵兵群易して敢て近
くものなし、特に彼四人義意を目がけ討て懸る、義意
たゞ一刀に打果さんとす、道寸共勇敢を憐て放免せし
む、落城の後道寸の芳志を感じ、爰に來て自盡す、故
に此名ありと云、